## 考古関連雑誌論文情報補完データベースの公開

考古学に関する調べものでは、発掘調査報告書や専門的な論文を参照することが多くあります。報告書の目録情報は、奈良文化財研究所が公開している「所蔵図書データベース」や「全国遺跡報告総覧」などで調べることが可能です。ただ、論文は雑誌に記載されていることが多く、雑誌についての書誌情報だけでは、詳しいことがわかりません。国立情報学研究所が無償で公開しているCiNii（サイニー）Articlesは、学術論文情報のデータベースで、考古学関係の論文も多数収録されています。しかし、考古学の領域では、地方で少部数だけ発行された雑誌も多く、その一部は残念ながらCiNiiにも載っていません。考古学に特化した論文データベースとしては、日本考古学協会が作成したものも公開されていますが、収録雑誌が少なく、近年の分の追加もおこなわれていない状況です。

そこで、奈文研は日本考古学協会の取組を発展させ、CiNiiを補うものとして「考古関連雑誌論文情報補完データベース」を作成しています。奈文研所蔵の考古学に関連していると考えられる雑誌でCiNiiに載っていないものを選び、一冊ずつ中身を点検して、論文を抽出してデータの追加をおこなっています。このデータベースによって、引用などで存在していることはわかっているのに、なかなか到達できない貴重な資料が少しでも参照しやすくなることを期待しています。

（企画調整部　森本 晋）

考古関連雑誌論文情報補完データベース
トップページ
（http://mokuren.nabunken.go.jp/ronbunhokandb/ronbun.html）

## 古代の「曼椒油」

『正倉院文書』等の古代の文字史料には、「胡麻油」（ゴマ）、「荏油」（エゴマ）、「麻子油」（アサ）、「閉美油」（イヌガヤ）、「海石榴油」（ツバキ）、「呉桃油」（クルミ）、「曼椒油」（イヌザンショウ）の7種類の植物油が登場します。古代において、植物油は食用のみならず、灯明や染織、塗装等、様々な局面で使われていました。

日本における植物油の起源に関しては、神功皇后の時に遠里小野で榛から油を搾ったのが初現だとする説があります。江戸時代の農業者である大蔵永常が記した『製油録』等にも書かれており、江戸時代には一般に流布していたのでしょう。しかし、古代の文字史料には「榛油」は登場しません。

いっぽう、古代において、よく登場するのは、榛ではなく椒の油です。その一種であるイヌザンショウから搾った油は「曼椒油」と呼ばれ、灯明油等に使われていました。

平安時代の『類聚名義抄』には、「榛」の読み方に、「ハシバミ、ハシカミ」と記されており、両者が混同されていた可能性が考えられます。また、「榛」の字は「榛の木」と書いてハンノキとも読みます。ハンノキは古来、染料に用いられ、遠里小野は『万葉集』にも詠まれるほど、その染織で有名でした。

近世になって、遠里小野は菜種油の一大産地として名を馳せます。江戸時代の農学者達は、このイメージもあり、椒と榛を混同した可能性もあります。いずれにせよ、古代の人々は、様々な木の実等から油を得ていたことは確実で、その使い分け等について、今後も追究を重ねていきたいと思います。

（都城発掘調査部　神野 恵）

右：木簡の赤外線写真

「丹波国味田郡曼椒油三斗」

左：木簡の写真

＊木簡は近赤外線撮影をおこなうことで、より鮮明に字を浮き出させることができる。

平城京左京三条二坊SD4750から出土した木簡